



TITLE:

京大広報 号外 1

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外 1. 京大広報 1997, 9711g1: 334-345

ISSUE DATE:

1997-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209220>

RIGHT:



# 京大広報

号外

1997. 11

## ● 創立百周年記念特集



創立百周年記念式典

### 目次

#### 〈式辞・祝辞〉

総長式辞 .....	335
文部大臣祝辞 .....	337
東京大学総長祝辞 .....	338
北京大学長祝辞 .....	340
奥田 東元総長祝辞 .....	341
大西正文後援会副会長 （大阪瓦斯株式会社社会長）祝辞 .....	342

#### 〈記念行事〉

記念式典・祝賀会 .....	343
記念音楽会 .....	344
記念特別講演会・シンポジウム .....	345

## 式辞・祝辞

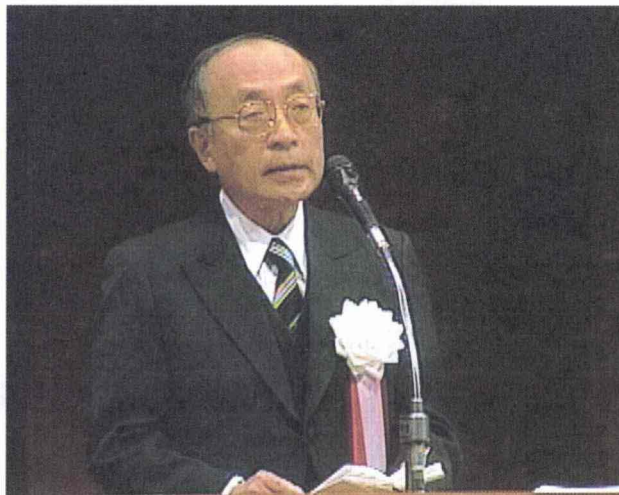
## 総長式辞

本日ここに町村信孝文部大臣、蓮實重彦東京大学総長、陳佳洱北京大学長など学術交流協定締結大学学長の皆様をはじめ、多数の御来賓の御臨席のもと、京都大学創立百周年記念式典を開催できますことは、大学にとって誠に大きい喜びであります。御多用の中、御出席頂きました皆様に、京都大学を代表し心からお礼を申し上げます。

京都大学は1897年（明治30年）に創立されましたが、関西に第二の帝国大学を作ろうとする動きはかなり長い歴史を持っています。しかし1892年（明治25年）長谷川 泰議員らが帝国議会に「関西ニ帝国大学ヲ新設スル建議案」を提出するに及んで、漸く具体化することとなりました。この建議案の中で同議員らは、大学が一つであると競争者がないため、教員も学生もその地位に安住しがちになると指摘し、互いに切磋琢磨できる第二の帝国大学の必要性を強調しています。この建議案は直ぐには実現しませんでした。日清戦争後の1896年京都帝国大学創設案が議会で可決されました。そして翌1897年理工科大学、99年（明治32年）法科大学、医科大学、1906年（明治39年）に文科大学が設立され、当初の目標が完成しました。

このように京都大学は、東京大学の良き競争者となるべき使命を帯びて創設されました。いまから丁度百年前の最初の入学者宣誓式で、初代総長木下廣次は、「当大学は東京帝国大学の支校にあらず、又小模型にも非ず、全く独立の一大学なり」とし、そのために「独得の資性を具えざるべからず」と述べているのも、当時の社会の要請を意識したものと考えます。木下総長は更に続けて、「大学学生にありては自重自敬を旨とし、自主独立を期せざるべからず。故に諸君は既に後見を脱したるものとして吾人は諸君を遇するなり。因て平素のことは細大注入主義によらず、自発自得を誘導することを務めんと欲す」と述べていますが、この言葉はその後京都大学の学風の形成にあたって重要な指針となったように思われます。

京都大学の創立に加わった教授の多くはドイツに留学し、大学での教育と研究は本来一体のものとするフンボルト的理念を理想として、わが国で



これを再現しようとしてしました。そして京都が政治、経済の中心から遠く位置していたこともあって、学問を新しい大学の中心目標に据えたのであります。千年の古都である京都の静謐な環境は、真理を探究する学問の府を作る場所として誠に相応しいものがありました。学問のためには、何よりも自由な発想が大切です。そこから自由を尚び、自主独立の精神に富んだ京都大学の学風が形成されたものと考えます。そしてその中から多数の創造性に富んだ人材が育ち、また多くの独創的な研究が生まれました。自然科学の分野で四名のノーベル賞受賞者を輩出したのも、単なる偶然ではないと私は考えたいのであります。

しかし京都大学が創立百周年を迎えた現在、大学の内部も、大学を取り巻く外部環境も、そして学問のあり方も創立当初に比べて大きく変貌しました。まず第一にかつて4分科大学の、比較的小規模な大学として発足した京都大学も、1914年（大正3年）の理科、工科の分離、次いで学部制になってからは経済学、農学、教育学、薬学、総合人間学、各学部の設置により10学部となり、更に人間・環境学、エネルギー科学研究科を含む11の研究科を擁する巨大な大学となりました。また1915年（大正4年）の化学研究所の設立に始まり、現在では13の研究所、17の教育または研究センターを設置しています。学部学生13,700名、大学院生6,900名、研究生等約900名、教職員数は5,300名を数えています。かつてカリフォルニア大学総長のクラーク・カーが指摘したよう



に、京都大学もユニバーシティというよりマルチバシティとなり、創立当初のような対面的人間関係を持つことは不可能となりました。そのため一つの組織体としての統合のあり方をここ数年来模索してきましたが、早急に確立すべき課題であります。

第二に京都大学をはじめわが国の国立大学は、基本的には明治時代の分科大学（学部）の枠組みを守りながら今日に至りました。理学部、文学部、工学部、法学部などの学部、そして学科、講座の枠組みであります。しかし学問のめざましい発展によって各学問分野の境界がなくなり、学際領域が急速に発展しつつあります。21世紀の世界の重要課題の解決のためには、こうした学際領域の果たすべき役割が極めて大きいと言わざるを得ません。そこで京都大学では、独立研究科として1992年に人間・環境学研究科、1996年にエネルギー科学研究科を発足させ、さらに明年には情報学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科を設置する計画であります。伝統的な学問を各学部及びその研究科で継承しながら、新しい学問のフロンティアを独立研究科で開拓しようとする構想であります。しかし百年前に発足した学部のあり方そのものについても、時代の変化に対応できているか否かを検討する必要があります。

第三に京都大学は、その地理的条件もあって国家と一定の距離を置き、時には国家と対峙する歴史も持ちながら、百年を歩んできました。反骨の精神はある意味で京都大学の伝統であり、それをバネにして独自の発展を遂げたとすら言えるかも知れません。しかし21世紀が目前に迫った現在、国家の性格は大きく変貌しつつあります。情報、金融、企業活動、物資や人の流れなどは、自由に国境を越えて移動できる時代となりました。次の世紀、世界は一つに融け合いながら、しかし激しい競争と文化の摩擦を起こすという、かつて人類が経験したことのない時代を迎えることは必至であります。その中で、国際的な情報の流れから比較的遠くに存在する東洋の、しかも一古都にある京都大学がどのようなスタンスで教育・研究を行い、世界に向けて何を発信できるのか、真剣に考えねばなりません。本学でも国際交流プログラムが始まり、諸外国からの学生を受け入れて本学の学生と英語で勉学するクラスが発足しました。この小さいクラスが、将来京都大学の教

育を大きく国際化させて行くパイロットの役割を果たしてくれるのではないかと期待しています。

第四に学問の世界でも、大学を取り巻く環境は、この百年の間に大きく変化しました。19世紀は大学の世紀であったと私は考えています。教育と研究を統合したドイツの大学が大きい成功を収め、全世界に影響を及ぼしました。京都大学も基本的にはドイツの大学の理念を受け継いでいます。しかし20世紀に入ると、アメリカでカーネギー研究所やロックフェラー研究所が発足し、やがて国立衛生研究所（NIH）のような巨大な研究機構が作られました。研究大学を生み出したドイツでも、1912年のベルリン大学の百周年におけるカイザーの講演を契機として、カイザー・ウィルヘルム研究所、後のマックス・プランク研究所が発足しました。20世紀は大学と研究所の共存の世紀であったと言えましょう。わが国でも多くの研究所が生まれましたが、マックス・プランク研究所やフランスのCNRSのような組織化されたものはなく、全体として大学優位の状態で推移してきたと私は考えます。

しかし21世紀を目前に控え、高等教育機関や研究機関には、大きい地殻変動が起こりつつあります。教育の面では人工衛星やインターネットなどの新しいメディアを用いた大学あるいは大学院教育が始まり、今後それらが国境を越えて拡大するものと思われます。研究面では公的な研究所のほかに、企業やベンチャーが次第に大きい存在となってきました。また、インターネットを用いるバーチャルラボの試みも始まっています。21世紀は大学をはじめ様々な教育・研究機関がネットワークを作り、世界の各地にテクノポリスではなくて知の都（ソフィオポリス）が生まれるのではないかと私は考えています。このようなネットワークの中で、大学の果たすべき役割を、いま真剣に考えるべき時であります。

21世紀には経済成長が制約を受け、物質的な豊かさを現在以上に求めることは困難になりますが、他方知の面では豊かな世紀になるものと思われます。否、積極的にそうするようわれわれは努力すべきであります。従って大学や大学院への進学率は今後とも増加するでありましょうし、生涯学習の必要性も一層高まるでありましょう。知の豊かな社会、それはまた生涯学習社会でもあります。生涯学び続ける

人を多く持たない国は、衰亡することは必至でありましょう。

従って教育・研究機関が多様化する21世紀にも、「学ぶことを学ぶ（das Lernen des Lernens）」場としての大学の役割は、決して小さくなるとは考えられません。若い人々に生涯学び問ひ続ける習慣と方法を身につけさせるところ、それが大学であります。未知なるものへの興味と探求心を培い養うところ、それが大学であります。今こそ大学は、21世紀の世界が直面するであろう様々な困難な課題に勇敢に挑戦し、人類の未来を切り開く人材をいかに育てるか、真剣に考えねばなりません。教育の改革こそ、いま大学が切実に求められている課題であり、その努力なくしては、次の世紀には教育・研究のネットワークの中で、大学は求心力を失ってしまうでありますよう。

本日は京都大学創立百周年記念式典にあたり、本学の建学の精神を思い起こし、その後の百年間に起こった変化のうち、重要と考えられるいくつかの点について、私見を述べさせて頂きました。京都大学は多くの課題を抱えながらも、いまその第二の世紀

へ一歩を踏み出したところであります。この大学の第二の世紀を、より豊かなまた力強いものとするために、百周年記念事業を計画致しました。主要な事業の一つはマルチバーシティ化した現在の大学の中で、構成員が集い合い、また外国も含めて学外の多くの人々とも交流し合える百周年記念館の建設であります。いま一つは学生や若い研究者の国際交流を支援する基金の充実であります。極めて厳しい経済環境にありながら所期の目標を達成できる見通しが得られましたことは、偏に大西正文氏、樋口廣太郎氏をはじめとする記念事業推進実行委員会の皆様、拠金を頂いた企業、教職員、卒業生など多くの方々の御厚意によるものであります。この席をお借りして、心からのお礼を申し上げます。

最後に本日御列席の皆様には、今後とも京都大学の歩みを暖かく見守り、御支援、御鞭撻を賜りますようお願いして私の式辞と致します。

平成9年11月2日

京都大学総長 井 村 裕 夫

## 文部大臣祝辞

本日、ここに、京都大学創立百周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

京都大学は、明治30年に創設され、爾来、次代を担う人材の育成と創造的な研究を発展させることを大学の使命として、自由な思考と未知の世界に挑む開拓者精神を重んじ、「自由の学風」を育ててこられました。

その成果は、昭和24年に湯川秀樹博士が日本人として初めてのノーベル賞を受賞されたのを始め、4名がノーベル賞を受賞されたことに見られるように、多くの傑出した人材を輩出され、我が国のみならず世界の学術文化の向上に大きく貢献してこられました。

このような優れた伝統を有する本学が創立百周年を迎えられますことは、誠に喜ばしいことであり、歴代の学長をはじめ関係各位の長年にわたる御努力



に、深く敬意を表する次第であります。

さて、近時、大学の在り方については、教育改革、科学技術振興、あるいは、行政改革など、社会の各方面から、様々の期待や改革を求める厳しい指摘が寄せられています。



これら様々な意見は、21世紀に向けて、我が国がさらに発展するための基盤として、大学が果たすべき役割に対する国民の期待の大きさの表われであり、これらに応え自ら改革、変革をとげていくことがまさに重要な課題となっているのであります。

本学におかれましては、このような大学に対する国民の期待、社会的要請に的確にこたえ、今後とも、我が国及び世界の学術文化の向上に大きな役割を果

たされることを切にお願いするものであります。

終わりに、御臨席の各界各位におかれましては、これを契機に、より一層の温かい御指導と御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、本学のさらなる発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

平成9年11月2日

文部大臣 町 村 信 孝

## 東京大学総長祝辞

京都大学創立百周年記念式典にあたり、国内の各大学を代表して祝辞を申し述べる機会に恵まれましたことは、私にとりましてこの上ない栄誉であり、言葉にはつくしがたい感動にうち震えております。その感動は、いま、私の内部に、いくつもの波紋となって揺れ動いており、それが、この瞬間に立ち会えたことの晴れがましい特権を、改めて思い知らせてくれるからであります。この祝辞の冒頭で口にさるべき言葉は、それ故、こうした感動を体験させて下さった京都大学に対する深い感謝の念の表明でなければなりません。そのつとめをはたした上で、いま、第二の世紀に向けて新たな歴史を刻まれようとしておられるこの京都大学の過去と現在と未来に向けて、心よりの慶賀と祝福の気持ちを送らせていただく次第であります。

私は、この思いが、いまこの場にご参列の京都大学の皆様にとどまらず、1897年いらい、この豊かな《知》的空間の構築に貢献されたすべての魂のもとにとどけばと祈らずにはおれません。京都大学という言葉は、私の心の中で、個性的な人影がいくえにも交錯しながらかたちづくる、大がかりな《知》のうねりを意味しております。この式典で真に祝福されるべきは、百年という時間の厚みを通して、多くの領域にいまなお生なましく息づいている大胆な個人的試みの、稔り豊かな成果にほかならないからであります。

いうまでもなく、こうした無数の個人的試みのどれ一つをとってみても、孤立した無償の実験に自足するものは見当りません。《知》の生産と蓄積と流通とにかかわる大学という機構にあって、個人の実



践は、しかるべき組織論との関わりにおいてのみ、有効に機能するものだからであります。この点で、京都大学は、個人主義とも集団主義とも異なるきわめてユニークな組織の原理を、いたるところに育んでこられました。それは、複数であることが単数であることといささかも矛盾することのない独特の原理であり、これが、他の大学には模倣しがたい貴重な《知》的資産を、時間を超えてかたちづくってきたのであります。ときに「共同研究」と呼ばれたりもするその原理は、しかし、たんなる「共同」の「研究」とは明らかに異質の試みでありました。京都大学における《知》の組織原理は、究明さるべき問題でも、それにふさわしい解答でもなく、新たな問題体系を視界に浮上させ、それを複数の存在が思い思いの手法で思考するというプロセスそのものにおいて、独創性を発揮するものだったからであります。

実際、京都大学は、しかるべき問題体系の周囲に

創造的な個人を核としたゆるやかな研究グループを形成し、そこでのいくつもの異質な個体同士の出会いを通して、個のたんなる総合とは異なる独特な《知》の濃度を醸成することに成功されました。そして、単数的でもあれば同時に複数的でもあるその濃密さをたがいに共有しあうという過程そのものが、『京都』的と呼ぶほかはない、創造的な刺激をあたりに行きわたらせることになったのであります。日本の古都に生まれたこの高等教育の機関が、たえず変容しつづける学問の先端的な担い手として、国内の他大学からの深い敬意とつきぬ羨望とをうけとめてきたのは、そうした理由によるものであったはずです。

京都大学が誘発する《知》的な刺激は、大学のみならず、社会の各層へとダイナミックな運動感を波及させるものであります。実際、人文科学、社会科学、自然科学の領域において、学界での権威の維持にのみ貢献する閉鎖的な師弟関係とはおよそ無縁の開かれた人間関係が、例えば哲学における『京都学派』の形成いらい、この京都大学を舞台として、創造的な《知》の組織化をおしすすめてきたのであります。その意味で、京都大学は、すでに、1930年代の初頭から、《知》の実験におけるリーダーシップがいかに発揮さるべきかを、実践的に熟知しておられました。また、今日ならCOE「センター・オブ・エクセランス」と呼ばれるだろうものを、その言葉が定着する遥か以前から、多くの領域に形成してこられたのであります。さらには、「国際化」といった昨今のかけ声がいささか空疎に響くほど、京都大学での研究の水準は、すでに戦前から充分すぎるほど国際的でありました。

ここで、あえて若干の固有名詞を挙げることをお許しいただけるなら、西田幾多郎教授や、吉川幸次郎教授や、湯川秀樹教授の業績の周囲にかたちづくられた複数の《知》的なグループは、優れた指導力のもとに形成される国際的なCOE以外のなものでもありません。そこでは、すべての構成員がたえず複数の機能を演じながらグループ生成の原理を体現しておりました。国内はいうまでもなく、いまでは海外にも広く知れわたっている『京都学派』とは、さまざまな領域におけるそうした複数のグループにふさわしい名前にほかなりません。実際、大学が存

在する日本の多くの都市の中で、「フランクフルト学派」のごとく、その名前がそのまま学術的な伝統を指示することになるような都市は、この京都を除いて存在していません。そのことをもってしても、国立大学の中心的な存在として京都大学を持つことが日本社会にとってどれほど意義深いものであるか、容易に理解できるはずであります。私たちは、こうした京都大学の伝統が、来るべき世紀においてどのような身振りを演じることになるか、息をつめて見まもっております。その身振りから、思いもよらぬ貴重な何かが生まれ落ちるのは間違いありません。それが、京都大学百年の歴史の細部を知悉している誰もがいただく確信にほかなりません。あと数年で21世紀に足を踏み入れようとしている日本社会は、いま、息詰まる閉塞状況を生きているというのが、広く共有された認識であります。しかし、近代日本のもっとも困難な時期においてさえ、歴史に残る有意義な仕事をいくつも残してこられた京都大学にとって、この一般化された悲観主義は、《知》的な濃度の醸造にいささかの障害ともならないばかりか、例外的な実験をくりひろげるための格好の契機とさえなるはずであります。

現在、神経症的と呼ぶほかはない過度の執念をもって、「変化」の必要性がいたるところで説かれております。そこでは、喜ばしき権利の行使として実現さるべき「変化」が、義務の意識に凝り固まった「変化」の不在へと大かたの思考を誘い、真に必要とさるべきダイナミックな運動感をあたりから一掃してしまいがちであります。例えば、「行政改革」の一環として、京都大学を、東京大学とともに「行政法人」化するといういささか性急な思いつきが、あたかも国民的な課題であるかのような真剣さで議論されたりするという状況も、そうした流れを反映するものにほかなりません。

こうしたとき、京都大学が、過度の楽天性に陥ることを排しながらも、事態がまとう偽りのペシミズムに対して、その独特な組織理論によって果敢な闘争をしかけておられることを、私たちはよく承知しております。実際、井村裕夫総長が会長をつとめておられる国立大学協会が、その優れたイニシアティブによって、たちどころに「行政法人」化反対の態度を表明したことは、御列席の皆様がご承知の通り



であります。だが、その事実は、国立大学協会が「行政改革」に背を向けたことをいささかも意味してはおりません。事態は、むしろその逆でさえあります。今の日本社会が必要としている大がかりな変化へのダイナミズムを、そうした偽りのベシミズムに彩られた「改革」の動きが断ち切りかねないと判断したからこそ、あえて反対表明がなされたにすぎません。「改革」とは、想定された状態に到達することで動きをとめる一過性の試みではなく、たえず動きを誘発するダイナミズムを、同時に単数であり同時に複数でもある組織の原理から導き出そうとする不断の試みでなければなりません。その貴重さを

教えてくれた京都大学に、私たちは感謝の気持ちを遥かに超えた賛嘆の念をささげずにはおれません。

京都大学が百年ごとに迎えるこのよみがえりの儀式にささげるべき慶賀と祝福の思いは、いま、私の中で、おずおずと語り始めた瞬間よりも遥かにはりつめたものとなっております。その真摯な思いが、京都大学百年の歴史のすみずみにまでゆきわたることを祈念しつつ、この祝辞を終わらせていただきます。

1997年11月2日

東京大学総長 国立大学協会副会長

蓮 實 重 彦

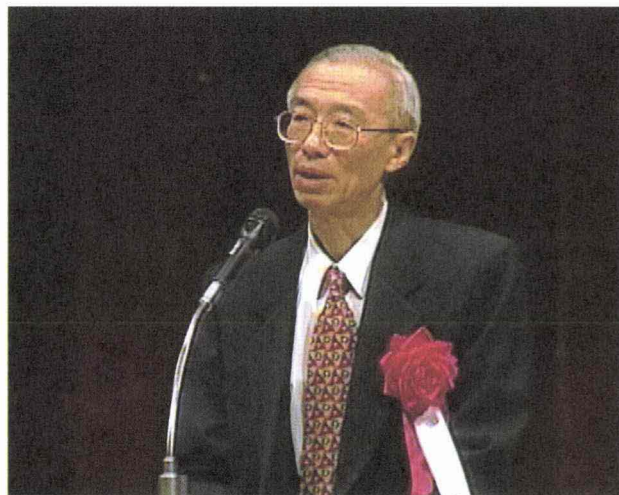
## 北京大学長祝辞

尊敬する井村裕夫総長

親愛なる京都大学の教職員の皆様、学生諸君  
御来賓の皆様

本日、京都大学創立百周年記念にあたりまして、中国北京大学を代表してお祝いの言葉を述べさせていただきますと思います。

貴大学は世界的に著名な総合大学であり、豊かな人材を有し、長い歴史を持つ日本の最高学府として、日本の教育界、学術界及び社会に大きな影響を及ぼしてこられました。明治時代の著名な教育家である初代総長木下廣次先生の下で、京都大学は教育と学術研究において、自由と創造を重んずる方針を掲げ、日本の大学の中で独特の学風を築いてこられました。1世紀の発展を経て、現在、京都大学は最初の理工科大学から理学、工学、農学、医学、薬学、法学、経済学、人文科学、社会科学、地域研究など学術のあらゆる専門を揃え、広範な研究分野に亘る総合大学に成長しました。貴国の近代・現代の歴史において、幾人ものノーベル賞受賞者をはじめ、多くの創造性に富んだ科学者、社会及び人文学者を育成し、世界的にも広く知られている“京都学派”を作り出しました。創造的な研究と個性豊かな人材の育成を通して、貴大学は世界の教育界、学術界において高い評価



を受けておられます。現在、井村総長の下で、京都大学は長い歴史を経て築かれた学風と伝統を継承しながら、新しい時代の要求に応じて、境界領域や複合領域の研究科等の創設と発展に努めると共に、世界的な新たな思想と知識を吸収し、常に学問の先導的な地位を占めておられます。

貴大学は、早い時期に我が大学と学術交流協定を結んだ日本の大学の一つであります。1983年4月に、両大学の総長により学術交流協定を結んで以来、両大学の間において学者の交流、講演会の実行、共同研究の実施を通じて、多くの実績を挙げて参りました。北京大学は貴大学と同様に百周年の歴史を誇る大学であります。百年来、北京大学は「民主、科学、愛国」の精神で多くの若い学者



を育成し、我が国の教育、文化と社会の進歩に大きく貢献して参りました。

大学教育の国際化は益々世界的な課題となり、如何に伝統を継承しながら、国際間の学術、教育、文化、研究の協力を促進し、全世界の経済、文化の発展と人類の進歩に貢献するかということが、世界の教育界に課せられた共通の責任であります。まもなく21世紀を迎える現在、北京大学は、京都大学及び貴国さらに世界各国の大学と共に、この

目標に向かって努力していきたいと思います。

最後に、京都大学の今後の益々のご発展をお祈りします。

どうもありがとうございました。

1997年11月2日

北京大学学長 陳 佳 洱  
訳 工学研究科助手 陳 新 中

## 奥田 東 元総長祝辞

京都大学が創立以来百年の齢を重ね、今日ここに輝かしい式典を催す運びとなりましたことは誠に欣幸の至りであります。

思えば明治30年京都の地に日本で二番目の帝国大学として発足して以来、京都大学の歴史を振り返りますと、人が代わり世が移ろうとも、本学を貫く精神は、常にたゆまない真理の探究とそれを可能にする条件としての研究の自由と大学の自治を求める精神でございます。京都大学は、「教育と研究の自由」の理念を、独自に内在化させ、その真価を主体的に表現してきました。

この1世紀の間、幾多の有能にして個性豊かな人材を各界に送り出し、学問研究の面におきましても常に国際的に最高水準の独創的研究に取り組み、世界をリードする数多くの成果を上げ、人類文化の発展に少なからぬ貢献を果たして参りました。

また、基礎的原理的な研究を重視する一貫した姿勢は、時流や功利に迎合せぬ重厚で底力のある研究者を生み出し、時代と国境とを越えて生き続ける学問的業績の蓄積を可能にし、日本の大学における学問研究に京都大学独特のスタイルを創り出してきました。

また、学生に対しては、こうした自主性と創造性を重んじ、自由闊達な気風を求めて止まぬ研究者の指導と感化の下で、多様にして多彩な知の世界に出合う機会を惜しみなく与えてきました。

このような京都大学の伝統は、新たな世紀に向かって揺るぎなく継続されていくものと確信いたしております。



現在の京都大学は、10の学部、11の大学院研究科、13の研究所、17の研究センター等を擁するにいたり、様々な学問分野において、それぞれに優れた業績を挙げ続けていることは、我々の誇りとするところであります。

この式典に当たりましては、諸外国のご来賓をはじめとし、国内各方面から、かくも多数のご臨席を仰ぎ、本学創立百周年をお祝いして下さること、誠に感激に堪えません。昭和42～44年の学園紛争の当時、総長として大学の責任者であった頃のことを思い浮かべるにつけても、一層感慨深いものがございます。

21世紀に向かって、京都大学の一層の飛躍とご発展、そうして日本のみならず、国際的にもさらに大きく貢献されることを希望いたしまして、私の祝辞といたします。

平成9年11月2日

京都大学名誉教授 奥 田 東

## 大西正文後援会副会長（大阪瓦斯株式会社社長）祝辞

大西でございます。母校京都大学の創立百周年を皆様方とともに慶び合いたいと存じます。私は、母校の創立百周年という歴史的な節目に巡りあうことができ、しかもこのような大変重みのある式典において祝辞を述べさせていただきますことは、卒業生の一人として誠に感激の極みであります。

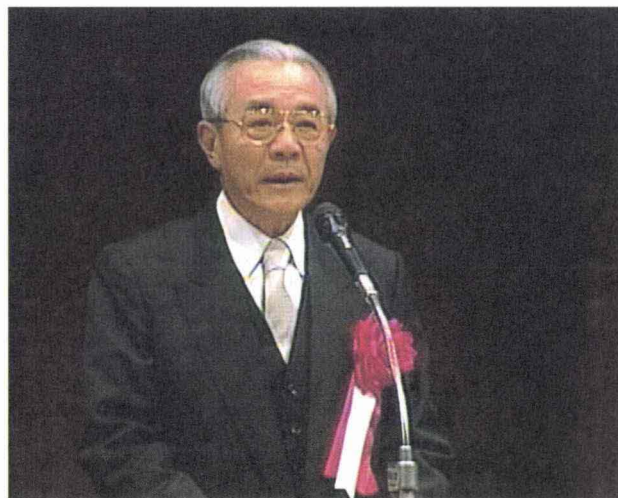
私は京都大学後援会長の三鬼 彰さんのご指導のもと、樋口廣太郎さんとともに、記念事業推進の一端を担わせていただきました。私どもからのお願いに対しまして、多くの皆様から格別の温かいご理解と積極的な御協力をいただくことができましたが、これもひとえに、卒業生の方々の母校に寄せる熱い想いと、関係各方面の本学への大きな期待の表れであると存じます。この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、「自由と創造」を重んじるユニークな学風と、独創的な研究や個性豊かな人材の育成を通じて社会の発展や人類の繁栄に大きく貢献してきた本学の功績は、国の内外から高く評価されており、卒業生としてこの上ない誇りであります。この本学の輝かしい栄誉は、いわば創立以来の諸先輩方から贈られたすばらしい遺産であり、私どもは現在その諸先輩方の崇高な志の結晶を享受しているといっても過言ではありません。

これから諸先輩方の後に続く者はその高い志を継ぎ、次なる百年に向けて次世代から感謝される新たな歴史のページを刻んでいかなければなりません。フランスの経済学者フランソワ・ペルーの言葉に、「過去は現在を規定するが、未来もまた現在を規定する」という言葉があります。これは、“現在は過去によって拘束を受けるが、現在もまた未来のあり姿をどう描くかによって、なすべき方向や方策が決まってくる”という意味であります。

本学が、今後とも常に未来からの視点に立ち、「世界から尊敬される京都大学」として、人類・社会の新たな進路を切り拓く力強い先導役を果たしていくことをお願いいたします。

十年前、本学の創立九十周年にあたって発刊された『京大史記』の中で、第16代総長の故・平澤 興



先生は、  
「ああ京都大学、それはすばらしい大学であったし、  
今後もまたすばらしい大学であろう。

京大の 春秋ここに 九十年

とわのいのちを 若がえりつつ

という言葉を残されています。

私ども卒業生にとって、本学は青春時代に真理の探求や人生観の確立に燃えた舞台であり、今も考え方や行動の原点として大きな心の支えになっております。その京都大学が、このたびの創立百周年を記念して作曲され、先程演奏されました記念式曲目である「<sup>ひかり</sup>輝を垂れて<sup>せんしゅん</sup>千春を映さん<sup>てら</sup>とす」の通り、その光が千年の後まで照り映えるような壮大な志を持つ大学として、限りなく発展し続けることを心よりお祈りし、お祝いの言葉といたします。

平成9年11月2日

昭和22年卒業生 大 西 正 文



## 記念行事

### 記念式典・祝賀会

京都大学創立百周年記念式典が平成9年11月2日（日）午前10時40分から京都会館において、町村信孝文部大臣をはじめ各界から多数の来賓、名誉教授、卒業生、教職員・学生約1,700名が出席し、盛大に挙行された。

記念式典は、最初に京都大学交響楽団による式典曲「輝を垂れて千春を映さんとす」の演奏で始まり、井村裕夫総長の式辞、町村文部大臣、蓮實重彦東京大学総長、陳佳洱北京大学長、奥田東元総長及び大西正文京都大学後援会副会長の来賓祝辞があった。

続いて、来賓紹介と祝電披露があった後、学歌を

斉唱して11時50分閉式した。

引き続き、記念祝賀会が京都市勧業館で開催された。祝賀会は井村総長の挨拶で始まり、岡本道雄元総長及び樋口廣太郎京都大学後援会副会長の来賓挨拶の後、文部大臣、文部事務次官、ユルゲン・ハーバーマス氏等総勢35名による「鏡開き」が行われ、沢田敏男元総長の乾杯の発声があり、招待者、教職員等多数が和やかに歓談し、本学創立百周年を祝った。

当日の司会進行は本学文学部卒業の辰巳琢郎氏が行い、京都大学応援団の演舞も披露され、西島安則前総長の挨拶で盛会のうちに終了した。





## 記念音楽会

平成9年11月1日（土）午後6時から「京都大学創立百周年記念音楽会」が、京都市左京区の京都コンサートホールで開催された。特別招待者をはじめ、本学教職員、学生及び一般市民など1,611名の来場があった。井村裕夫総長から挨拶の後、井上道義氏指揮による京都市交響楽団、フルートの佐々木真氏、オルガンの高橋聖子氏の演奏が行われた。女性で初めて尾高賞を受賞した新進気鋭の作曲家藤家溪子氏に委嘱した記念式典曲『輝を垂れて千春を映さんとす』が初演された。この曲名は李白の『古風』という詩より引用されたもので、「その光りが千年の後まで照り映えるような、すばらしい詩を生みた

いと思う」という意味であり、京都大学の気概を込めたという。なお、この式典曲は、今後、京都大学の式典等において演奏される予定である。

晩秋の一夜、藤家溪子作曲の式典曲をはじめ、尾高尚忠の「フルート小協奏曲 作品30a」、サンサーンスの「交響曲第3番〈オルガン付き〉ハ短調作品78」、アンコール曲、マスカーニの「カバレリア・ルスチカーナ」の間奏曲も含め約2時間、名曲の調べに酔いしれ、会場が割れんばかりの拍手のうちにフィナーレとなった。





## 記念特別講演会・シンポジウム

11月3日（文化の日）本学創立百周年記念の行事として、京都テルサホールにおいて、「20世紀から新世紀へ」をメインテーマとして、記念特別講演会が午前10時から、記念シンポジウムが午後1時30分からそれぞれ開催された。

記念特別講演会は本庶 佑医学研究科長・医学部長（創立百周年記念シンポジウム実行委員長）の司会のもとで、井村裕夫総長（創立百周年記念事業委員会委員長）の開会の挨拶で始まり、最初に、現代思想をリードする社会理論家ユルゲン・ハーバーマス氏（フランクフルト大学名誉教授）が「惨禍から何を学ぶのか—短き20世紀を顧みて」と題して講演し、続いて、分子生物学の創始者シドニー・ブレンナー氏（米国・分子科学研究所長）が「知—果てしなき探求」と題する講演を行った。

午後の記念シンポジウムは「知の軌跡と大学の可能性」と題して開催され、本学出身の著名な学者4名、前京都国立博物館長、京都大学名誉教授藤澤令夫氏（哲学）、ロンドン大学名誉教授森嶋通夫氏（経済学）、山口大学長、京都大学名誉教授廣中平祐氏（代数幾何学）、マサチューセッツ工科大学教授、京都大学客員教授利根川 進氏（分子生物学）がパネリストとなり、主討論者として本学から法学研究

科教授佐藤幸治氏、文学研究科教授紀平英作氏が加わり、理学研究科教授佐藤文隆氏の司会により進行された。

前半は、各パネリストから冒頭発言があった後、主討論者のコメントと会場から本学の若手研究者を代表して、法学研究科助教授中西 寛氏、文学研究科助教授福谷 茂氏、工学研究科助手牧 紀男氏の3氏の発言があった。休憩をはさんで、後半は21世紀の大学や学問の在り方等について、パネリスト及び主討論者間に活発な討論があり、多くの貴重な提言が出された。

この記念特別講演会・シンポジウムは、多くの聴衆に21世紀の人類にとって全地球的課題の解決には何よりも人間の「知」が必要であり、「知」の生産と継承の場所としての大学の役割について多くの示唆を与えるものとなった。

当日は記念特別講演会902名、シンポジウム972名の多数の参加者があり、盛会のうちに終了した。

なお、この記念特別講演会・シンポジウムは、後日報告集のかたちで印刷物として纏められる予定であり、また記念シンポジウムについても、来る12月5日（金）NHK教育TV「金曜フォーラム」での放映が予定されている。

